

徳富蘇峰と新島襄
ー蘇峰再評価の動きの中でー

講演	伊藤 彌彦 [いとう・やひこ]
講師紹介	同志社大学名誉教授

はじめに

昨年、二〇一三年は徳富蘇峰生誕一五〇年にあたり、生まれ故郷の熊本県水俣市や熊本市では記念シンポジウムが開かれました。今日は同志社の大先輩で恩人の徳富蘇峰という人物をご紹介しながら、彼の人生を再検討しようと思います。しかしなしろ、彼は九十四歳という長寿の主であり、自由主義者蘇峰から超国家主義者蘇峰までの揺れ幅の大きな人なのです。日本の歴史そのものを反映したような彼の波乱の人生について、まだトータルな本格的な研究書は書かれていません。生涯に亘る足跡を記したものには、早川喜代次『徳富蘇峰』と安藤英男『蘇峰 徳富猪一郎』がありますが、十分とは言えません。これまでで一番すぐれた鋭い分析は、植手通有が筑摩書房の『明治文学全集』に書いた「解題」ですが、明治期に限定された記述で、すでに植手氏は亡くなってしまいました。また同志社キャンパスでの蘇峰論の大半は、新島襄との関連を論じた部分的なものに止まっています。また逆に、同志社外部の研究は新島襄を無視してきましたから、どちらも不十分なのです。

戦後書かれてきた蘇峰研究は、三国干渉ショックで転向する以前の自由主義者蘇峰研究に集中していましたが、ごく近年、澤田次郎『徳富蘇峰とアメリカ』というすぐれた作品が生まれました。それ以外では、戦後歴史観への反動と言える戦前・戦中史の再評価の空気のなかで、知性の墮落を示すような軽薄で表面的な言説で、昭和前期の右傾化した蘇峰を再評価する議論が登場しはじめています。

蘇峰自身は「言論の自由」に関してリベラルです。蘇峰の三女の夫で身近に接していた阿部賢一は、「〔蘇峰に対する〕毀誉褒貶には、他の方々はどう御覧になるか知りませんが、私にはそう気にしていないようでした。随分ひどくやつつけられていても、むしろ楽しんでいたようです。誰々はひどいことを書きおつたが、文章はうまいねー、などと、それも皮肉でなしに淡々と語っていました。良心に恥じないからの自信もあつたでしょう」と書いています（『翁の思い出』荒木精之編『追想の徳富蘇峰』日本談義社 1958年 130頁）。ですから、最近流行しはじめたヒステリックな修正主義史観の風潮には、天上の蘇峰さんも顔をしかめているし、その空気のなかでなされる自分に対する再評価の風潮には、苦笑しているのではないのでしょうか。

ジャーナリスト・政界の裏方・修史家としての三つの顔

彼は生涯において三つ、大きな仕事をしました。一つはジャーナリスト、出版人。二つ目は政界の黒幕としての世論操作。三つ目に修史家としての活動でした。まず出版人のことですが、実は出発点の蘇峰は、社会改造を志すベンチャー起業家でした。彼は同志社英学校を中退後、熊本に帰郷し、日本社会を変えようと大江義塾を作ります。そこで青年たちに話した内容をまとめて、明治十八（一八八五）年に私家出版した本が東京の有識者の間で評判になり、後に改題して出版したのが『新日本之青年』です。前年には『将来之日本』を出版しました。初期の代表作です。自信を得た彼は塾をたたんで上京し、次は国民一般を対象に社会教育をしようとして、発行したのが『国民之友』という雑誌です。さらに新聞事業を起こし、借金をして国民新聞社を設立しました。その借金の保証人が新島襄でした。ジャーナリスト蘇峰の立ち位置は、出版起業家というベンチャー精神に支えられていたことを、まず申し上げておきます。このように、大変華々しい出発でした。明治維新後に混迷していた日本のこれからを示した『将来之日本』はベストセラーになり、蘇峰の民友社には共鳴する青年たちが集まってきました。世間は、福沢諭吉の次世代のオピニオンリーダーが現れたと騒ぎました。蘇峰が二十五歳ごろのことでした。『国民之友』は、当時、破格の購読者数を集め、『国民新聞』も世論指導力を発揮しました。良い意味でも悪い意味でも、戦前の日本で非常に長い間、最も影響力をもっていたジャーナリストが蘇峰です。単なる新聞記者ではありません。筆一本で、日本を変えようとする野心的なジャーナリストでした。単なる事実の報道家ではなく、人びとの意識を変革し指導しようとした。『所謂の伝道の精神は、何人にも劣らなかつた。而してその所謂の伝道とは、キリスト教の伝道ではなくして、治国安民の伝道である。即ち日本国を世界第一等国たらしむる為めの伝道である。この伝道には、第一の武器は、文章である。第二の武器は演説である』（徳富蘇峰『徳富蘇峰 終戦後日記Ⅲ』講談社 2007年 42頁）と語っています。つまり、出発点にあった社会改良家の姿勢が国家改良家に姿を変えて生き続けています。その手段が新聞記者なのです。

東京の自宅の敷地五〇〇坪を提供して青山会館を建てたのも、社会事業家としての一面です。「青山会館は、日本国中、否な海外に亙りたる日本青年の交通、紹介の倶楽部です。固より決して東京市民のみの、専有ではありません。一般の民衆が共に学び、偕に楽しむ平民倶楽部です。固よりブルジョア階級の物ではありません。入学試験も無く、束脩も無く、月謝も無く、僅かに入場料を払う乎、払わぬ乎の、平民の大学です。男子と云はず、婦人と云はず、老人と云はず、幼者と云はず、清新にして、健全なる娯楽の享受場です。手軽に日新の知識を翫る簡易図書館もあれば、財囊の重からざる地方青年の、暫時の上京に寄宿する便宜もあります。数千人の大集会も出来れば、数百人の小集会も出来ます」（『青山會館設立主意書』国民新聞社内青山会館設立事務所 大正10年10月8日）と言います。

二番目の姿は、政界の裏方として世論操作をした蘇峰です。彼は第二次松方内閣（薩摩閣）の勅任参事官になりました。今まで民間から藩閥批判発言をしていた蘇峰にとって、これは大転身です。変節漢と呼ばれて『国民之友』の売れ行きが突然落ち、廃刊に追い込まれるほどの出来事でした。

特に関係の深かったのは桂内閣です。「一度こい、二度こい、三度淀川の、恋ぞつもりて淵となりぬる」という歌を残していますが、桂太郎に会ってみると、その人間性に魅了されてしまったようです。蘇峰は桂太郎の懐刀（ふところがたな）となり、閣外から『国民新聞』を通じて支援し、大変な影響力をもちました。特に日露戦争で大國ロシアに勝利した成功感忘れ難いものだったと思われます。その後、ポーツマス講和条約の締結推進の世論指導をしたため、日比谷事件で、国民新聞社も焼き討ちに遭います。第三次桂内閣の「大正の政変」の時も、『国民新聞』は内閣を代弁する立場を取ったため、二度目の焼き討ちに遭います。

桂太郎の突然の死は蘇峰の心に大きな虚脱感を生みました。しかしまだ寺内正毅朝鮮総督に協力して『京城日報』監督として政界と繋がっていましたが、大正七（一九一八）年それを辞任したのを機に政界から身を引き、文筆活動中心に戻ります。しかし昭和に入ると再び東條英機内閣の時に、裏方に回ります。その影響力は、大東亜戦争開戦の詔書に筆を入れるほどのものでした。

蘇峰は何を目的に政界とかかわったのか。桂内閣の時は、自分は新聞人として桂を動かそうとしたのだと言いました。東條内閣についても「私は東條を教育してやろうと思った。他の人は東條を敵とした。私は東條を正しく導いたら役に立つと思った」と言っています。

三番目の顔は歴史家、修史家としての蘇峰です。最大の業績は『近世日本国民史』全一〇〇巻を書き上げたことです。中断を含み、大正七（一九一八）年から昭和二十七（一九五二）年までかかっています。近衛家・柳沢家・水戸家などから幕末の貴重な史料をたくさん借りて読み、自分の思うところを自由に書いたものです。資料読みが面白いんだと自身で語っています。この「自由に」というところが蘇峰の特徴です。

蘇峰くらい他人から牽制されず、自分の思うことを自由に書けた人はいませんでした。そういう意味では「大市民」と言っている生涯を送った人です。自分で新聞社を立ち上げたベンチャー起業家だから、自由の境地において仕事ができた。そこに注目をしていただきたいのです。

一度だけ、蘇峰にも自由に書けない時期がありました。国民新聞社が関東大震災に遭って本社を建て替える金がなく、東武鉄道を経営する根津嘉一郎に三〇〇万円を出してもらい、根津の傘下に納まった時です。

その時蘇峰は、自分の言いたいことが自由に言えないという経験を初めてしました。「併し大正十五年の四月頃から、昭和三年の終迄、彼は三年間、予は自分ながらよく辛抱したと思うた。（中略）要するに予は此の三年間を、一生の中に於て、最も精神的に不愉快の期間であつたと思ふ。後にも先にも此れ以上の不愉快は無く、又たこれに類したる不愉快も無かつた。（中略）予の筆政も漸次拘束せられた。殆ど予は社長でも無く、主筆でも無く、一種の傭人同様にて、資本家の注文次第で筆を執らねばならぬ様な位置に、陥りつつあるに気付いた」（徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社 1935年 525、527頁）と回想しています。そこで昭和四年には国民新聞社を手放し、修史家として立ちます。その後、大阪毎日新聞社社員のポストを得て自由にコラムを書き続けました。

蘇峰の言論活動の原点

彼はなぜ文章を書いたのか。それは反骨精神であつたと、還暦を前にして蘇峰は自己分析しています（『中央公論』中央公論社 大正12年1月）。当時は、ワシントン海軍軍縮条約などが結ばれた直後です。この時の蘇峰の反抗対象は白人閣でした。彼は農家の出身ですから、まず士族閥に反抗し、同志社では宣教師閥に反抗しました。彼にはJ・S・ミルを読む英語力がありながら、「英語の同志社」では英語コンプレックス、反感をもっていました。初期民友社では藩閥批判、そして支那閥、露西亜閥に反抗する日清・日露戦争を経験してワシントン体制以降は白蘭退治を唱えます。こういう反抗精神が、ジャーナリズムにおける基本的な立ち位置でした。ただ次第にナショナリズム色を強め、国際社会における日本の立場と自己同一していききました。

蘇峰は最初、非常に鮮明な平民主義者として出発しました。その後帝国主義者に変わり、日露戦争後から皇室中心主義を言い出します。『蘇峰自伝』という面白い本があります。少年時代、自己形成に非常に大きな影響を及ぼしたのは兼坂塾であつたと言っています。蘇峰は文久三（一八六三）年に庄屋の息子として生まれ、明治四（一八七一）年に元田塾、竹崎塾を経て兼坂塾に入ります。この兼坂諱次郎は熊本藩でも比較的上位の武士でしたが、明治維新で士族身分を捨てて農業を始め、塾を開いて新しい文明をどんどん取り入れていきました。蘇峰、つまり猪一郎少年はこの塾に住み込み、日々労働するということを身をもって学びます。そして、自分は労働しないのに人びとの上に立つ士族を痛烈に批判しました。よく彼は「士族根性」という言葉を使い、それに対して自分は「平民主義者」であると言いました。蘇峰の「平民主義」という言葉には、明らかに士族社会に対する抵抗意識があります。後年、平民主義とは実はデモクラシーの訳語だが、「民主」というと皇室と結びつかなくなるので「平民」という言葉を使ったと言っています。

そういう彼の考えを盛り込んだのが『新日本之青年』であり、『将来之日本』でした。徳川社会で一番偉かったのは將軍でも大名でもなく、実は「習慣」だったのだと彼は言います。皆が伝統習慣に支配され、それに従って暮らしていた。そこから人間を解放するのだと。これはＪ・Ｓ・ミルの『自由論』のなかの言葉です。蘇峰は呼びかけました、新しい歴史を作るのは、無名の明治の青年たちだ、天保の老人はもう時代遅れだ、と。蘇峰はそれを『新日本之青年』のなかで「天真爛漫の青年」と書いています。蘇峰自身が「天真爛漫の青年」として生きた人です。

「力の福音」との出会いから皇室中心主義へ

次に彼が期待したのは「中等社会」です。上流も下流もいけない。自ら労働する人びとによる社会こそが日本を作る、経済活動によって平和な時代になるのだと。これはマンチエスター・スクールという、イギリスの経済学の影響を受けています。

しかし、それはうまくいきませんでした。蘇峰は既に明治二十四（一八九一）年に「中等社会の墮落」という論文を発表しています。松方デフレの影響から地主層は分解していき、一部の不在地主と多くの小作に分かれていきました。金が集まった地主は投機活動を起こし、落ちぶれた者は一攫千金を目指しました。モラルは失われていきました。

新しい日本の基軸として、蘇峰はキリスト教徒に期待しましたが、すぐに諦めました。彼らは自分の魂の救済は考えるが、社会、国家のことを考えていない連中でした。蘇峰は近代革命期に政治家になったミルトンやクロムウェルのようなクリスチャンを予定していたのに、そういう人物が日本にはいないと言ってキリスト教に失望しました（新島先生は例外）。明治二十年代の中ごろです。

蘇峰の意見が変わったのは日清戦争の後です。日本は下関講和条約で割譲を受けた遼東半島を、三国干渉によって返さざるを得なくなった。道理が通っていても、力をもっていないれば何も役に立たない。力をもっていると無道理であっても通用するという事実、彼はこれを「力の福音」の洗礼を受けたのだと言いました。

そこから彼は、日本を力のある国にしなければいけないと言い出しました。産業で平和にやっていると saying いていた路線が、ここで大きく変わったのです。明治二十九年五月から翌年七月まで、蘇峰は英語に堪能な深井英五を連れてヨーロッパ、アメリカを周り、世界を視察します。そして帰国直後、松方内閣の内務省勅任参事官に就任しました。今まで藩閥や士族に対抗意識を見せていた蘇峰が薩摩閥に協力するようになり、官僚になったのです。

桂内閣に協力して、『国民新聞』を通じて世論指導を行った訳ですが、ここで民衆の反撃に遭い、二回も焼き討ちに遭います。期待していた平民主義が社会にうまく根づいていないことを思い知らされます。都市に住む平民が群衆であること、そして政党政治家に操られる存在だと考えはじめます。ここで立憲制や政党政治に対する懐疑も強まったことで、やがて「皇室中心主義」に行きつきます。ただ、桂太郎が生きている時は、まだ政党政治に期待をもち、政友会に対抗する政党として、いわゆる「桂の新党」を立ち上げようと尽力しました。その政党づくりの事務所として、国民新聞社を提供したほどでした。しかしその桂太郎が死にます。後日、『時務一家言』（徳富猪一郎 民友社 1913年）の緒言でこう言います。「時務一家言は、予か窮愁、無聊、鬱鬱、失望の余に成りたる文字也。予は少くとも此の意見の若干を、桂公及び其の新政党に因りて実行せんことを期せり。然も桂公の臥病は、予をして此の希望を、水泡に帰せしめたり」と。

言葉としての「皇室中心主義」は、初版の『吉田松陰』（明治26年）に二回ありますが、その中身は後の概念と繋がっていません。蘇峰の示唆に従って私の調べたところでは、この言葉は明治四十五年七月二十六日の「御病状再び増進（東京便り）」に書き込まれています。そして何よりも『時務一家言』が「皇室中心主義」を正面から掲げた本です。「桂の新党」工作も水泡に帰し、政党政治に期待できなくなった時、国民を団結させ「挙国一致」にもち込むための資源として辿り着いたのは「皇室」でした。「吾人の帝国主義は、大和民族を本位としたる帝国主義也。吾人の平民主義は、日本国民を総括したる平民主義也。（中略）然も帝国主義や、平民主義や、社会主義や、悉く挙げて之を繋ぐものは何ぞや。吾人が平昔唱道する皇室中心主義是れ也。（中略）我が国民の挙国一致なるものは、只だ皇室を中心として一致する也」（五二「皇室中心主義」『時務一家言』439、440頁）。

政界から離れ、文筆業に戻った蘇峰は、大正五（一九一六）年に『大正の青年と帝国の前途』を出版しました。『将来之日本』『新日本之青年』を根本的に改作したもので、一〇〇版以上を重ね、一〇〇万部以上売れました。蘇峰のもので一番売れた作品です。この本のなかで彼は青年たちに、自由主義の立場や自分中心主義を捨て、挙国一致でもっと国家に協力しなさいと言いはじめました。ここで明らかに路線が変わりました。

しかし翌年の大正六年、蘇峰は『杜甫と彌耳敦（ミルトン）』を出しました。『大正の青年と帝国の前途』とは傾向の違う二冊を同時期に出版したわけですが、『大正の青年と帝国の前途』は国民世論指導用の著作で、帝国主義論、皇室中心主義の集大成でした。『杜甫と彌耳敦』では積年の自分の信条を綴っています。自分の本当の気持ちです。ミルトンは、イギリス革命の時に国王を殺して共和制にしたクロムウェルの秘書をやっていた人物です。共和主義者ミルトンの考えを語り、キリスト者新島襄を日本のミルトンと看なしたものです。しかしそれは、国民一般向けの発言とは明らかに分離していました。本心が二つに割れていたと言えると思います。

先にちょっとお話ししましたが、昭和四（一九二九）年、国民新聞社を失意のうちに手放した時、蘇峰に同情した人びとが激励会を開いたところ、なんと二〇〇〇人以上も集まってくれました。その集会がきっかけになり、一年後の一九三〇年二月十一日に「蘇峰会」が生まれました。蘇峰会とは、「皇室中心主義」を全国各地に浸透させる目的で生まれた組織でした。各地に支部をもち、二〇〇〇人近くの会員が発足しました。実はそれまでの蘇峰は、年に二、三回しか講演を引き受けなかった人でしたが、蘇峰会ができたこと、この年だけで全国各地、十八回も講演に廻りました。かつては学生層以上の読者層を言論の対象としていた蘇峰でしたが、一転、一般国民を対象にした講演や執筆活動を行うように変わりました。国民新聞社から毎日新聞社に移ったことも、蘇峰の読者層を国民一般に広げました。

昭和十四（一九三九）年には『昭和国民読本』を書きました。神話時代からの天皇の話です。日本が一九一〇年になって世界に皇道を掲げていくんだと、コミンタリアニズムのようなことを書いています。

昭和十一（一九三六）年に蘇峰は、日清戦争以前に書いたものは大目に見てほしいと語っています。当時は若気の至りで、藩閥を攻撃さえすれば日本国民としての義務をまっとうしたと思っていた。でも三国干渉に出合って考えが変わったのだと。一九四〇年、神兵隊事件の第九十六回公判で、蘇峰は右傾化した兵隊たちの証人として陳述します。そのなかで、自身が明治維新の自由主義教育、あるいは同志社の自由主義の影響を受けたことは認めています。その上で、自由主義からヘトヘトになりながら皇室中心主義になった、と言いました。ある種の本音だと思えます。

皇室中心主義と平民主義との融合

このように、蘇峰の立ち位置は時代と共に変わっていきました。少しまとめてみると、彼は「平民主義」という旗はずっと降ろしません。しかしそれを皇室中心主義と重ねていきます。「平民主義と今後の政治」（『中央公論』明治41年3月）ではこう言います。「いうまでもなく我帝国は古来より平民主義の最も行われたる国である。歴史の上には階級もあり、豪族もあれども詮ずる所は上に一君万乗の天皇を戴き、下には万民皆同朋である」と言う観念は殆ど我歴史の初めより今日迄を一貫したる大主脳にして維新の改革も畢竟此方向に動いたものに外ならないのである。言い換うれば我國に於ける尊王主義は平民主義の父母である」。そして、デモクラシーは国民の支持がないといけない、帝国主義も国民の支持がないといけないから、平民主義と帝国主義は兄弟なんだと言います。

皇室中心主義を平民主義とつなげて語るのには、いくつかの理由があったと思います。一つは、デモクラシーの落とし穴を蘇峰がよく知っていたということです。丸山眞男は『日本の思想』のなかで、「精神的貴族主義」ということを言っています。多数者の意思におもねっていると、行き着くところ、易さにつく。視聴率至上主義の今のテレビと同じです。だから良い意味での精神的貴族主義とデモクラシーを合わせないと、民主主義はとんでもないところへ行ってしまう。蘇峰も初めはキリスト教と平民主義を合わせようとしたが無益を感じました。そこでおそらく、日本でモラルを代表するのは皇室であるというところで、両者を結びつけたのだと思います。

『国民教育論』で彼は、天皇制をもってくることで日本国民のモラルは維持できるのだと言っています。同じ本では、責任の観念、自主の精神、公共心を養うことが大事であるとも言っています。こういうところに明治時代の蘇峰のリベラルな面が残っています。服従だけのモラル観ではないのです。

一君万民とか皇室中心という、もう一つ、つなげるのは「天皇親政」です。これは軍部のなかで皇道派が唱えた考え方です。議会政治に失望し、明治天皇のもっていたようなリーダーシップを昭和天皇に期待し、戦争指導でも中心的役割を期待します。美濃部の天皇機関説には批判を公言します。そして神兵隊事件の証人となり、議会主義や政党政治について批判しました。やがて満州事変から日米戦争が始まると、蘇峰は対米戦争必勝の言論活動の中心に立ったのでした。それは後に、超国家主義者と言われる言説でした。

新島襄との関係

新島襄との関係をお話しておきます。蘇峰が少年期にまず新島から影響を受けたのは、新島の人格主義でした。新島は「キャラクター」という言葉多用します。これは新島がアメリカにいたころの時代背景と関係します。キリスト教が少し世俗化していき、科学の台頭によって、聖書中心主義に対して人びとが懐疑的になっていった。人格教育が盛んに言われ始めた時代だったのです。

『蘇峰自伝』で彼はこう言っています。「同志社に於ては、予は人格主義の何者たる乎（か）を体得したる心持がした。（中略）人間の生活は畢竟、高尚なる奉仕の為にするものであり、人間の価値は奉仕する心の純潔と熱誠とに依つて、定まるものであると云ふ事を教へたのは、新島先生である」（108、109頁）。新島襄の説教に接した多くの学生たち、たとえば元良（もたら）勇次郎や深井英五の回想には「人生は目的をもって生きないといけない」という意識が育ったことが読み取れますが、蘇峰もその一人でした。蘇峰は同志社時代にどんな目的を見つけたか、それがジャーナリストになることでした。

蘇峰はむしろ同志社を退学してから新島と意気投合しますが、それは平民主義で価値観を共有したからです。新島もまた、ボストンでアメリカの市民社会を学んできた人です。後に日銀総裁になる深井英五は家が貧しかったため、アメリカの篤志家ブラウン夫人からの奨学金を受けており、そのために毎月一度新島先生宅に立ち寄りましたが、その情景を「私に向つて稍々熱を帯びて話されたのは、組合教会と一致教会との合併問題が起つた時だけである。先生は各自銘々の信念を重しとする組合主義の見地から教会の内部を権力組織せんとする合併運動に反対された。其の理由を熱心に説明されたのである」（深井英五『人物と思想』日本評論社 1939年 166頁）と書いています。平等な資格でのびのび自分の意見を言える「言論の自由」、そして各自の信念、つまり「良心」を尊重する組織づくりが新日本に不可欠だと新島襄は感じていました。あるとき新島は、蘇峰に宛てた手紙にこんなことを書いています。「君ニハ政治上ノ平民主義ヲ取ルモノニシテ、僕ハ宗教上ノ平民主義ヲ取ルモノナレハ、ツマリ平民主義ノ旅連ナリ」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集3』同朋舎出版 1987年 486～487頁）と。

新島は組合派教会に属していました。組合派は信従がみな平等にものを言い、最後は多数決で決めます。まさに宗教上の平民主義です。そこで二人は共鳴し合い、助け合っていました。

それが一番はっきりするのが「同志社大学設立の旨意」です。そのなかで蘇峰は、軍隊式の師範学校を作った明治政府を「国家の奴隷を作っている」と批判します。これでは意志の

弱い人物しか生み出さない。むしろ独自一個の見識を備え、良心を手腕に行動する独立自由人をつくる、天真爛漫の青年を育てるのだ、それは私学しかないのだと。ここで新島と蘇峰は共同歩調を取りました。

そのような二人の間で違っていたのは宗教観でした。蘇峰は、日本人にとってはナショナリズムが宗教になっているのだと言います。準戦時体制下の昭和十年、同志社大学創立六十周年記念の演説ではこうも言います。自分の皇室中心主義に対して、新島先生はまだそこまで行き着いていない。もし先生が生きておられたら、自分の考えは新島先生の考えを受け継いでものだと先生はおっしゃるであろうと。新島の愛国心や皇室観を自分の唱える日本精神に近づけて、かなり自分勝手な解釈をしました。新島は愛国者でしたが、新島が愛したのは民です。民を愛することによって国を愛した。この蘇峰の発言を聞いて、新島原理主義者とも言える安中教会の牧師柏木義円は、「蘇峰は墮落した」と言いました。

戦後の蘇峰

戦後はどうなったか。蘇峰にとって日本の敗戦は、人生最大の挫折体験でした。そして自分の言行の責任を自覚し、ただちにすべての役職、文化勲章や官位も返上し、公的生活から引退しました。自らの戒名を「百敗院泡沫頑蘇居士」と記します。昭和二十年十月十二日の日記に彼の和歌があります。「此頃八達ヒタイ人ノ多クレド 別ケテ達ヒタイ新島先生」。

蘇峰はA級戦争犯罪容疑者に指名されましたが、重い神経痛のために自宅拘禁となり、財産差し押さえ処分を受けました。一九四七年九月、自宅拘禁を解かれましたが、公職追放は一九五二年四月まで続きました。その間、『近世日本国民史』執筆を再開し、ついに一九五二年に全一〇〇巻を完成させました。戦後は三度同志社を訪問しています。なぜか戦後の蘇峰は無収入と思われるのに、人徳のせいか周辺には世話をする秘書や速記者や看護師などが集まり、不思議と生活苦のない人生を送ります。それどころか最晩年には、熱海の自宅や三〇〇〇坪の山中湖の別荘、それに周囲が寄贈してくれた寄附金を、惜しげもなく同志社に寄附し、最期に身辺において愛読していた蔵書も同志社に遺贈しています。読書欲は相変わらず旺盛で、元大阪毎日新聞の城戸元亮が入院した時は、「翁は、病中の読み物として、英文のレーニン伝を届けて呉れた」（城戸元亮「手紙を通じて見た蘇峰翁」『追想の徳富蘇峰』日本談義社 1958年）。レーニンまで読んでいたのです。

食欲も旺盛です。「昭和三十一年秋、翁が寝込んでいることを聞き、秘書子に、病状を尋ねてやつたら、衰弱してはいるが、間もなく快復するだろう。面会は断っているが、食事は、いすに懸けて取れるようになった。御安心を乞う、という意味の返事が来た。御参考に、と翁の食事の献立てが、中に書いてある。

一、牛乳四合 一、鶏卵六個 一、かゆーわん 一、小さな結び二個 一、果物各種少量 一、くず湯一合 一、果物のジュース三合（なし、りんご、ぶどう） 一、刺身タイ五切れ 一、みそしる軽くーわん。

これが一日分だというのだから、九十翁としては、相当なものである」（『追想の徳富蘇峰』35頁）。
また、自分の葬式については、自分は有信者であると言い、キリスト教の葬儀を望み、霊南坂教会で行われました。

蘇峰に学ぶ自立のすすめ

戦争が終わり、蘇峰の書いた文章に煽られて戦地へ行った青年たちは、蘇峰に幻滅しました。戦後は『将来之日本』『新日本之青年』だけが評価され、蘇峰は戦犯扱いをされました。しかし、最近はまだ時代が変化して、右傾化したころの蘇峰を再評価する軽薄な動きが出てきました。

蘇峰自身はどう自己分析していたのでしょうか。晩年故郷の熊本に帰った時のあいさつを聴いた人の文章がありますので、紹介しておきます。
「『私は歴史を作る人間になりたいと思つてゐたのに、歴史を書く人間に終つてしまつた。私は人生の失敗者だ』と彼は言つた。最後の帰郷（講師註 一九五二年五月）で、熊本市民への挨拶の言葉であつた。椅子に深々と腰をおろし、つぶやくやうな低音で語るその言葉を、同じ壇上にあつてすぐうしろから、私は聞いてゐた。その言葉には一抹の悲しみがこもつてゐた。平生、私は新聞記者です、とむしろ誇らしげに語つてゐた彼を知つてゐるだけに、私はいたく心打たれたことを憶えてゐる」（森本忠「明治と共に生きた人」『追想の徳富蘇峰』38頁）。蘇峰の本音だったように感じます。

言論人としての姿勢について触れておきます。蘇峰は、自分の意見が変化したことは認めるが、しかし自分としては、その時その時の情勢を考えて最善の意見を提示したのだと言います。

「『将来之日本』は、二十四歳の著也。其の瑕疵百出は、固より当然のみ。予が『将来之日本』の原稿を懐（いだ）き、熊本大江村の閑居を出て、土佐に赴き、東京に抵（いた）り、炎風虐日、黄塵滾々の裡、熱汗を揮うて、其の出版の方便を求めたる當時を、今日より回顧すれば、隔生の感なしとせず。然も当時の予に於ては、唯た最善を竭したるのみ。昨日は昨日の儘にて、最善を行ひ、今日は今日の儘にて、最善を行ふ。予復た何をか恨み、何をか悔いむ」（徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』民友社 1916年10～11頁）。

また桂政権に協力した時の発言についても、「世人は予を目して、御用記者と云へり。されど予は桂公の政友たる以外に、何等の義務にも服したる事なし。予は我が良心の許容せざる意見に、未だ曾て賛成したることなし」（緒言十五『時務一家言』31頁）と語り、良心に従つた言説だったことを誇らしく語ります。

「予は敢て自ら誇るでもなければ、自らを弁護するでもない。多くの言論著作の中にて、これだけは取り消して置きたいと思うようなものは、殆ど自ら見出さない。少くとも予は、その當時に於て、予が最善と思うたる事を語りて、僭越乍ら我が国民を、その方向に導かん事を期した者である」（『徳富蘇峰 終戦後日記Ⅲ』46頁）。

ここには自分の発言が自己欺瞞でなされた意識はなく、個人的自我の面では、非常に健康に生きていました。したがって、非難された文章もスクラップ帳に保存して、「五百年後」の評価を待つ、と胸を張ります。多くの識者が「実は本心は△△だった」と、以前の発言を弁明する態度とは対照的なのです。公的発言としては、さまざまな要因で間違つた発言をした責任がありますが、私的內面的には自己欺瞞がなかったから精神的な健康さが見られると言うべきでしょうか。ともかく本人は、「うそ」をついて国民を導いたのではなかったのでしょう。しかし、ここが評価の難しいところで、自己欺瞞のない発言ならばすべて許されるのかという問題があります。蘇峰の社会的発言に導かれて行動を起こし、歴史の犠牲者となった者に対する責任問題は残っているのではないのでしょうか。ジャーナリストとして過去の発言に対する責任の問題です。ここには「良心に従う」という心情倫理としての誠実性によって、政治倫理としての誠実性を無媒介的に合理化する論理が潜んでいるからです。

最後に、蘇峰の生き方が現代とどうつながるか。『上野先生、勝手に死なれちゃ困ります』（光文社新書）という面白い本があります。上野千鶴子さんと教え子の古市憲寿（のりとし）さんという二人の社会学者による、世代間闘争の対話を書いたものです。上野千鶴子は現代の青年たちに、もっと元気を出せ、一人ひとりが事業主になりなさいと忠告しています。戦後の高度成長で中流階級意識が九割となり、『将来之日本』で描いた夢に近づきました。しかしまだ個人は「社畜」にすぎず、しかも中流が二極分解しつつある現代において、自分が自分の主人公でありつづけた蘇峰の生き方と、上野千鶴子の起業家になって自立しなさい、百姓（ひゃくせい）社会を作りなさいという言い方は、共通しているのではないかと思います（二〇一五年七月補筆）。

付記

あつる出版社から植手通有の遺稿集三部作中の『植手通有集2 徳富蘇峰論』（2015年6月30日）が刊行された。そこには筑摩書房『明治文学全集34 徳富蘇峰集』の「解題」を拡充補正した論文が収録されている。

2014年6月11日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地「講演」記録